

一〇月八日(日)

キッチンから漂ってくるクリーム甘い匂いに、遠くの方でケビンが切なそうに声を上げている。キッチンにいるはずの沙綾が、「近所迷惑でしょ」とケビンに叱っていた。彼女がそんな風に声を荒らげたところで、彼は微塵も言うことを聞かないだろう。それに、美味しそうな匂いについて反応してしまうのは仕方がない。

私は愛犬と娘のやりとりを棚に上げ、目の前のモニターに意識を向け直す。キーボードとマウスを操作して、最後のページまで目を通した。

「で、これを印刷したのがこれです」

一輝さんが、一番前にPDFを表示して、モニターを指しながら横に置いたA4用紙を指差した。彼は再び、「コレが、これです」と画面のデータと印刷物とを紐づけるかのように指を動かした。

「書き換えたいところがあれば、こつちを編集してください」

彼は横からキーボードを操作して、スライドの編集画面に切り替えた。

「新しく印刷する場合や、編集方法が分からない時は、またボスに連絡してください」

「忙しいのに、ゴメンなさいね」

「いえいえ。お世話になってますから」

彼は笑いながら、持ってきた印刷物を、持ってきた真新しいクリアファイルに納めてくれた。私は「メディアを取り出す」ボタンを押して、「コレで、外しちゃって大丈夫かしら？」と画面を確かめてもらいやすいように身体を引いた。一輝さんはモニターを見ながら、「ああ、コレで大丈夫ですね」とUSBメモリをゆつくり取り外す。

彼はそのまま、食卓の椅子にかけていた薄手の上着のポケットへ、USBメモリを放り込んだ。それを見ていた沙綾が、目の前の鍋をゆつくりかき混ぜながら声をかける。

「ねえ、終わった？」

一輝さんは、私の方をチラリと見て「多分」と返事をした。私は彼に頷いて返

し、背中を向け、開いていたファイルを順番に閉じた。電源は切らずに、モニターも閉じる。

食卓の方へ振り返ると、洗面所で手を洗ってきたらしい一輝さんが、リビングへ戻ってきていた。私も彼に倣って両手を洗いに行く。キッチンの方がにわか騒がしくなり、ちよつぷりヒヤツとする音も聞こえてくる。パパツと手を洗い、リビングに戻ると、沙綾と一輝さんとで夕食の準備を進めてくれていた。幸い、何かを落としたり、何かを割ってしまった様子はない。

「もうちよつと丁寧に扱って頂戴」

「高いのは分かっているから、大丈夫、大丈夫」

怪我をしていないのなら、食器の値段なんてどうでもいい。どうしても身振り、手振りが大胆になりがちな彼女には、野暮な注文だろうし。奔放な育ち方をした割には、シチューをお皿に盛り付けるぐらいは出来るようになっている。

一輝さんは一輝さんで、穴だらけの彼女をサポートしつつ、彼女では考えもつかないようなところを、しつかりケアしながら動いていた。一皿一皿、仕上げにパセリを散らしながら食卓に並べ、冷やしておいたワインの栓も抜こうとしてくれている。

一輝さんは、沙綾に何を握られているのか。そんなことを考えながら、久しぶりにケビン以外の誰かと夕食を共にする日曜日。資料作り、また頼んでみようかしら。

初出 令和三年一〇月二三日 PIXIVにて公開